

## 瑞巖寺

瑞巖寺は、雄藩であった仙台藩（現在の宮城県を含む地域）の初代藩主であり、仙台市の礎を築いた伊達政宗（1567-1636）の命により、1609年に再建されました。

この場所には828年に建立された天台密教の寺がありましたが、この寺は鎌倉時代（1192-1333）に禅宗に改宗し、その後長期にわたって廃れていました。17世紀、政宗はこの寺を伊達家の菩提寺とするため、そして自身が浄土へと往生できるよう功德を積むために復興させることを決めました。

寺の参道には、濡れると鏡のような光沢を放つ地元産の石材が敷き詰められています。この参道は、寺を取り囲んでいる岩壁面に連なる洞窟群のそばを通ります。最も古い洞窟は鎌倉時代のもので、

瑞巖寺には3つの門があります。御成門は天皇専用の門で、最後にこの門が開けられたのは明治天皇（1852-1912）の来訪時でした。中門は、領主や祭事の行列のための門でしたが、現在参拝者はこの門を通して中庭に入り、政宗が朝鮮（現在の韓国）から持ち帰った樹齢400年の二本の梅の木を鑑賞することができます。登龍門はかつて庶民に使われていました。本堂に入るには、大きな木造屋根の煙出しが特徴的な庫裡という巨大な台所の建物のそばを通ります。

本堂と庫裡の外観は、白い壁とスレート葺の傾斜屋根を支える濃い色の木材で組まれた梁が印象的です。このような要素によって、瑞巖寺は（大規模ではあるものの）禅寺の様式を思わせるすっきりとした簡素な見目をしています。政宗は自らこの寺の縄張り（建物の位置取り）を行なったと言われています。

素朴な外観とは対照的に、瑞巖寺本堂の内部は、光り輝く屏風絵や凝ったつくりの格子天井画、緻密な木彫などで装飾されており、伊達家の嗜好、権力、財力を伝えています。このような外観と内装の対比は伊達家の家風です。また、暴風雨や台風の多いこの地域では莫大な費用がかかるにも関わらず広い屋根をあえて瓦で葺くことを選ぶなど、見落とされがちな細部を通して裕福さを演出するのも特徴的です。

寺院ではあるものの、瑞巖寺はむしろ城に近い間取りがされています。城と同様、各部屋の装飾は、奥に進むにつれてより豪華になります。領主や客人に茶や菓子を出す係の詰所だった「松の間」には比較的簡素な鶏や鳩の絵が描かれていますが、政宗と側近の部屋であった「文王の間」では、壁全面を中国の伝説に登場する桃源郷の精緻な絵画が覆っています。部屋の後部に一段高い壇が設けられているのは、天皇専用の「上々段の間（文字通り「最も高い部屋」）」です。

瑞巖寺の緻密な木彫は、瑞巖寺の建物と同様、京都からはるばるやってきた職人たちによって作られました。軒下には繊細なブドウの意匠が彫られており、御成玄関の内部には興味深いやや痩せたサイの彫刻があります。

何世紀にもわたって、瑞巖寺は松島の経済と文化の中心的役割を果たしてきました。江戸時代（1603-1867）の最盛期には、何千人もの僧や奉公人が寺院を訪れる多くの巡礼者の世話をしていました。

江戸時代より後になって境内の面積は減りましたが、瑞巖寺は今でも地域の中心的な存在です。2011年の東日本大震災と地震に伴って発生した津波の際には、住民は安全を求めて瑞巖寺に避難しました。津波によって瑞巖寺の参道は破壊され、かつて道に沿って並んでいた巨大な百年杉は失われてしまいましたが、寺の主な建物は無事で、瑞巖寺は松島の住民に避難場所を提供しました。

本堂、御成門、庫裡はいずれも国宝に指定されています。御成門とその両脇の太閤塀、中門は重要文化財に指定されています。